

特定非営利活動法人日本癌病態治療研究会 理事長  
千葉大学 大学院医学研究院 先端応用外科 教授

## 松原 久裕

今年も巻頭言を書く季節となりました。COVID-19のことを書くことも、また今年もか、という感じになります。ただ、これまでとは違いようやく第8波が収束し、感染症の分類も5月の連休明けに第5類となることが決定され、世の中がコロナ前の状況を徐々に取り戻している風景が散見されるようになりました。すでにマスク着用が個人の自由となり、飲食店でのアクリル板も撤去されるようになってきました。町や電車の混雑度もとても増えてきた感じがあります。外国からの観光客も増えてきました。

本研究会は昨年、徳島・鳴門において島田光生当番世話人により開催され、たいへん興味深いプログラムにより久しぶりに現地開催されました。やはり現地での開催は盛り上がり、最近現地開催でも行われることが少ないポスター発表も行われ、熱心な発表と質疑にやはり「これだな」と再認識しました。WEBの良い面は否定できませんが、やはり学会、研究会の醍醐味であり本質である深い討論は、現地での開催がとても重要だと思います。また、診療、研究を通じた人のつながりをつくるのも学会、研究会の重要な要素ですが、それも対面できないと新しい関係は築きづらいと思います。会場のアオアオリゾートもすばらしく



ウィーンの地下鉄出口付近

良好な人間関係を築くにはもってこいの会場でした。コロナ禍での準備、開催にご尽力いただいた島田先生をはじめ教室の皆さまに心より感謝申し上げます。

今年は萩原弘一教授に当番世話人をお願いし、さいたま市にて開催されます。COVID-19が第5類となって初めての開催となります。現在のところ、現地開催として予定されております。多くの演題を出していただき、熱い討論が繰り広げられることを期待しております。よろしくお願いたします。

昨年の巻頭言では行動範囲がまだ国内に限られていましたが、昨年の5月に帰国後の待機が解除され、外国への渡航も少しずつ増えてきました。私自身も積極的に行くべきと考え、8月にウィーンの国際学会 (International Surgical Week)、マイアミの国際肥満外科学会 (IFSO) に参加しました。今となっては日本でも日常の光景に近づきつつありますが、その当時の日本の景色とはまったく違う様相でした。ウィーンに関しては市内の公共交通機関ではFFP2 (米国のN95と同等) 規格のマスク着用が義務づけられていましたが、往きの飛行機のオーストリア航空のCAさんが機内でまず着用していませんでした。ウィーンの街中でもほとんどの人が着用せず、地下鉄の



ウィーンの街中



乾杯！

出口から出てくる人もほとんどしていない状況であり、その違いにたいへん驚きました。その当時は帰国前72時間以内のPCR検査陰性が入国に必要であり、ウィーン市内の私営の検査所で高い料金を支払い、検査を受けました。検査を受ける人は日本人くらいのように閑散としていました。日本用の所定の報告書も用意されており、日本人がお得意さまなのだ得心ができました。何かあると困るので72時間になるべく近い時間で検査をと考え検査を受け、その結果が出るまではたいへん不安な時間を過ごしました。陰性との結果がメールで届き、安堵するとともにたいへん嬉しく感じました。その後、1人で乾杯しましたが、陰性の結果後の開放感、安心感からそれまでの行動様式が変容し感染のリスクがとて高くなるのでは考えさせられました。水際対策として行われていた訳ですが、その有効性に関しては大きな疑問が残りました。ほとんど無駄だと思いました。米国の状況もウィーンとほぼ同様でした。日本はまさに鎖国状態だと実感させられました。

日本は現在第8波がほぼ収束し落ち着いた状況ですが、街の風景はその当時

のウィーンやマイアミと違いまだなおマスクをしている人がとても多く、国民性の差なのかたいへん興味深く思います。第5類となり今後どのような状況になるか判りませんが、制限のない社会が戻ってくることを期待しております。本研究会に関しましても、コロナ前以上の活性化を目指し、皆さまのご協力、ご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。



マイアミの日の出